

(英語版)

(アラビア語版)

(目次)

見果てぬ平和 ― 中東の戦後75年(百二十一)

第五章：二つのこよみ(西暦とヒジュラ暦) (六)

百二十一 ジュラ暦千四百年(西暦千九百八十年)前後(三一五)



翌千九百七十九年一月(ヒジュラ暦千三百九十九年、以下わかりやすいため西暦で表す)にイラン革命が発生、七月にはイラクのサダム・フセインが大統領に就任、エジプトに代わるアラブ盟主の座を狙う。八月にはサウジアラビアでマッカ神殿占拠事件が発生、サウド家を震撼させた。そして翌千九百八十年九月(ヒジュラ暦千四百年、すなわちヒジュラ十五世紀の最初の年)にはイラン・イラク戦争が発生、イランのホメイニ師がイスラームという宗教の盟主を目指し、他方イラクのサダム・フセインはエジプトに代わるアラブ民族の盟主を目指して宗教と民族が地域の覇権を競う。

この時、サダム・フセインはこの戦争をイスラームのシーア派とスンニ派の争いと規定し同じスンニ派のサウジアラビアなど湾岸産油国から軍資金を引き出した。しかしサダム・フセインのイラクもサウド家のサウジアラビアなど湾岸の君主制国家も実態は世俗国家そのものである。イラン・イラク紛争は宗派間の争いではなかった。緒戦で苦戦したイランで国民の志願兵が雲霞のごとく戦場に繰り出したのは宗教的使命感に駆られたイラン国民がアラブ人の世俗国家に戦いを挑んだ「聖戦(ジハード)」と見るのが正しい。

(続く)

荒葉 一也

E-mail: Arehakahazuyai@gmail.com